

雷

常磐津 全詞章

常磐津

西沢一鳳 述

変化物『四季写土佐絵拙』の一段

作曲者・初演年不詳

ゆふだち 夕立や田を見廻りの神鳴も、富士と筑波を右左、晴渡りたる雲の上、平気で洒落て鼻唄で
した 遊びの羨まし、チト遠見と摺火打、雲と見紛ふ煙かな
げかい 遥に見渡せば

木の間に茶船が見ゆる、艀を押す声のええさつさ

さつと屋根舟で弾く三味線の、中の小唄の顔見たや

さへつ押へつ天目酒に、さんなんよつの無理酒は、エエ畜生奴が洒落のめす、此方も負けと
持ち前の、太鼓拍子で一踊り

かね 鐘と念仏でわしや暮すなら、雲とまかせてわたりやせん、鈍な事して太鼓を落した、こんな
いかり 錨で引上げよか

さんぜん 三千余町成田屋の、其稲妻の師の光り、音も高島屋と鳴響き、雲間くもまと駆り行く駆り行く